

テモテへの手紙第二3章16節 「聖書の靈感」

1A 聖なる書物

1B 書き留められた命令

2B 朗読された言葉

3B 心が裂かれる王

2A 神の息

1B 天地創造と人のいのち

2B 御霊のいのち

1C 聖霊による預言

2C 人を救い、生かす言葉

3C 御霊による悟り

3A すべて

1B 神の権威

1C すべての命令

2C 一点一画

3C 空文化する教え

4C すべてを信じない者たち

5C 神のことば

2B 預言の確かさ

1C イザヤの預言

2C イエスの予告

3C 啓示の完成

本文

テモテへの手紙第二 3 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、テモテ第二 2 章まで来ていました。今日は、午後礼拝で 3 章を一節ずつ見て行きます。今朝は、16 節に注目します「**聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。**」

テモテは、エペソで教会の監督をしている指導者でした。そこに、いろいろな作り話を持って、人々をだましている人々が教会の中にいました。しかし、テモテは幼い時から聖書に親しんでいました。母親と祖母が教えていたのです。パウロは、テモテを励まして、彼が学んで確信したところにとどまっていることを勧めました。まことしやかに、いろいろな議論を反対者はふっかけてくるのですが、聖書だけが人々を良い働きに整えるのに十分なのだということを教える中で、パウロは、聖書とは何かを教えています。

みなさんは、聖書に親しんでおられるのでこんな疑問を抱かなかったと思います。私は、教会に訪問した時、こう思いました。「みな、教会に、聖書を大事に抱えてやってきている。なんか、ちょっと気持ち悪い。世の中、いろんな本があるけれども、聖書を何か神さまみたいに持ち上げている。」と感じました。そして、こうも思いました。「聖書ばかりを見ているけれども、これを読み終わったら、次に何か読むものはあるのか？」なんて、思いました。信仰を持ってからも、「なぜ、「幸せな結婚生活のために」みたいな、ハイツ一本のほうが聖書をいちいち見て行くよりも、手っ取り早いのではないか？」なんてこと、思ったりしました。けれども、これらの疑問はみな、ここテモテ第二 3 章 16 節の言葉で、解決されることになります。聖書は、ただの人間の書物ではなく、神のことばそのものであること。そして、この書こそが、私たちをあらゆる良いわざに十分に整えることができるのだ、ということです。

1A 聖なる書物

1B 書き留められた命令

「**聖書**」と訳されている言葉は、ギリシア語では単に「書かれた物」という意味です。その言葉を聞けば、ユダヤ人であればすぐに、旧約聖書のことだと分かるそうです。神から語られた言葉を、神ご自身から書き留めるように命じられたのは、モーセです。「出 24:12 【主】はモーセに言われた。「山のわたしのところに上り、そこにとどまれ。わたしはあなたに石の板を授ける。それは、彼らを教えるために、わたしが書き記したおしえと命令である。」その書かれたものが、そのまま、神のことばなのだということということです。これが、聖書の始まりです。

2B 朗読された言葉

ゆえに、モーセは、これらが自分の言葉ではなく、神そのもののことばであることを知っているの
で、心に留めるために、あらゆる努力をするように勧めました。「申 6:6-9 私が今日あなたに命じ
るこれらのことばを心にとどめなさい。これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが
家で座しているときも道を歩くときも、寝るときも起きるときも、これを彼らに語りなさい。これをしる
しとして自分の手に結び付け、記章として額の上に置きなさい。これをあなたの家の戸口の柱と門
に書き記しなさい。」子どもたちに、よく教え込みなさいと命じていますが、まさにテモテの母と祖母
が、このことを彼に行っていたのですね。

そして、モーセを通しての神の命を受けて、ヨシュアたちが約束の地に入りました。エリコの町を
攻略し、それからアイの町を倒しました。そして、かつて父祖アブラハムが約束の地に入ってから、
初めに祭壇を立て、いけにえを献げたシェケムにきました。そこで、モーセから命じられている通り
のことをしました。それは、まず、律法の書を読むことです。シェケムは、約束の地において、地理
的に真ん中に位置します。その中心で、律法の書を読むことによって、主のことばによってこの地
は治められることを証しました。また、石の上に律法の写しを書きました。さらに、シェケムは、エバ
ル山とゲリジム山の間にありますが、それぞれの山に六つの部族が立ち、主の呪いと祝福のこと
ばを宣言しました。このようにして、主の書かれた言葉こそが自分たちを生かすことを証しました。

3B 心が裂かれる王

しかし、ヨシュアが死んで間もなくして、さっそく主の前に悪を行いました。士師の時代です。けれども、主は王をイスラエルのために立たせてくださっていました。ダビデです。モーセは、予め、イスラエルが王を立てる時には、こうなさいと命じていたことがありました。祭司やレビ人たちから、律法の書を書き写すことです。「申 17:18-19 その王国の王座に就いたら、レビ人の祭司たちの前にある書から自分のために、このみおしえを巻物に書き写し、自分の手もとに置き、一生の間これを読まなければならない。それは、王が自分の神、【主】を恐れ、このみおしえのすべてのことばと、これらの掟を守り行うことを学ぶためである。」

ダビデの次にソロモンが王となり、ソロモンの死後、王国が、北イスラエルと南ユダに分裂しました。歴代の王の多くが、律法を見向きもなくなりました。しかし、何人かが主に立ち返っています。その一人がヨシヤです。彼は、神殿の修復を命じました。すると、そこに律法の書を見つけました。それで、大祭司は書記にそれを手渡し、書記は王の前で読み上げました。すると、ヨシヤは衣を裂いたのです。「Ⅱ列王 22:11-13 王は律法の書のことばを聞いたとき、自分の衣を引き裂いた。王は祭司ヒルキヤ、シャファンの子アヒカム、ミカヤの子アクボル、書記シャファン、王の家来アサヤに次のように命じた。「行って、この見つかった書物のことばについて、私のため、民のため、ユダ全体のために、【主】を求めよ。私たちの先祖たちがこの書物のことばに聞き従わず、すべて私たちについて記されているとおりに行わなかったために、私たちに向かって燃え上がった【主】の憤りが激しいからだ。」彼は、主を愛していましたが、神のことばに触れていませんでした。その書かれたものを読み聞かせられた時に、自分たちがことごとく、主のみこころに損なったことを行っていたことに気づいたのです。その衝撃はひとたまりもなかったでしょう。これが、聖書が、教え、戒め、矯正、義の訓練のために有益だ、ということでもあります。

2A 神の息

このように、聖書は、書かれた物であります。そしてパウロは、その書かれた物が、靈感を受けていると教えています。靈感という言葉、なかなか難しい訳です。それぞれの言語が、翻訳に苦労しています。英語では、インスピレーションです。韓国語は、日本語の「感動」の言葉をあてがっています。どれにしても、しっかりと行きません。これは、「神の息が吹きかけられた」という意味です。聖書は、神の息が吹き込まれたというのが直訳です。

1B 天地創造と人のいのち

主が言葉を発せられる時、その息があります。天地創造において、主はご自分の息による言葉によって、それらを造られました(ヘブル 11:3)。

そして、主は、同じ息によって人を造られています。「創 2:7 神である【主】は、その大地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。」人は、霊を持つようになりました。神ご自身のいのちの息が吹き込まれたからです。ちなみに、ヘブル語では、

息も霊も、同じ言葉になっています。したがって、神のことばは、同じ息によって、私たちの新しくされた霊に語りかけるのです。イエス様が、語られました。「ヨハ 6:63 いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話してきたことばは、霊であり、またいのちです。」私たちが新しく生まれさせた御霊が、私たちの霊に語りかけてくださいます。

2B 御霊のいのち

1C 聖霊による預言

聖書の中に、預言者が語るのは聖霊によることが証しされています。ダビデの最後のことが、サムエル記第二に書き記されています。「23:2 【主】の霊は私を通して語り、そのことばは私の舌の上にある。」主の霊によって語っていると主張していますが、私たちの主イエス・キリストが、その通りであると確認しておられます。「マル 12:36 ダビデ自身が、聖霊によって、こう言っています。『主は、私の主に言われた。「あなたは、わたしの右の座に着いていなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで。』』そして、使徒ペテロも、聖霊によるものだと確認しているのです。「使 1:16 兄弟たち。イエスを捕らえた者たちを手引きしたユダについては、聖霊がダビデの口を通して前もって語った聖書のことばが、成就しなければなりませんでした。」そして、第二の手紙でこう言っているのです。「1:21 預言は、決して人間の意志によってもたらされたものではなく、聖霊に動かされた人たちが神から受けて語ったものです。」人間を通して語られているのですが、決してその人の意志によって語られているではありません。聖霊によって動かされた人たちが、神から受けて語っています。

2C 人を救い、生かす言葉

ですから、神のことばによって、人は生かされるし、また救われます。ペテロは、第一の手紙でこう言いました。「1:23 あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく朽ちない種からであり、生きた、いつまでも残る、神のことばによるのです。」ヤコブも手紙の中で、同じことを語っています。「ヤコブ 1:18 この父が私たちを、いわば被造物の初穂にするために、みこころのままに真理のことばをもって生んでくださいました。」

3C 御霊による悟り

このように見て行けば、みなさん、お気づきになったと思います。聖書は、霊的な書物であるということです。単に知性によって読むものではなく、知性も感情も大事ですが、それ以上に霊によって読むものであるということです。私たちが霊的に活かした同じ御霊が、この言葉を書き残して下さっているからです。私は、新しく信じた方々に、いや、すべての信じている方々にお勧めします。ぜひ、聖書を開く時には、聖霊が理解する力を与えてくださるようにと祈ることです。

御霊がみことばをくださっただけでなく、私たちに悟りの力も与えて下さっているからです。「I コリ 2:13-14 それについて語るのに、私たちは人間の知恵によって教えられたことばではなく、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばによって御霊のことを説明するのです。生ま

れながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらはその人には愚かなことであり、理解することができないのです。御霊に属することは御霊によって判断するものだからです。」私たちは、非常に知性が優れている人々が、必ずしも聖書の理解が深いかというと、そうでないことに気づきます。いや、まるで理解がないことに気づき、驚くのです。その時に、人は神の御霊に属することは、生まれながらの人間は理解できないのだ、ということに気づくのです。

人が福音にある、キリストにある神の栄光の輝きについて、ぜひ祈っていきましょう。理解ができない人は、悪魔がその光を輝かせないようにしているからです。「Ⅱコリ 4:4 彼らの場合は、この世の神が、信じない者たちの思いを暗くし、神のかたちであるキリストの栄光に関わる福音の光を、輝かせないようにしているのです。」霊の戦いです。

3A すべて

そして、聖書が神の息が吹きかけられている言葉であるならば、その言葉は、必ず成就しなければいけないことを見て行きます。先ほど、ペテロが語ったことに、「聖霊がダビデの口を通して前もって語った聖書のことばが、成就しなければなりませんでした。」とありました。主が語られたのだから、その通りになるのだ、必ずその語られたことを実現するのだ、ということです。これを、無謬という難しい言葉があります。誤謬が無い、ということです。

1B 神の権威

そこで次に、「**聖書はすべて**」という言葉に注目してほしいのです。聖書の中には、部分的に神の靈感があると言っていないのです。大体、神のことばがあるといっています。すべて、と言っているのです。ギリシア語でも、「聖書は、どこにおいても、神の靈感によって書かれた」というように書かれています。英語ですと、All Scripture ではなく、Every Scripture となっています。

これは、一体何を表しているのでしょうか？神の権威を表しています。聖書が、この部分は神からのものかもしれないけれども、ここは人が勝手に書いたのだろう、とするのであれば、その時に自分自身が最終権威になっているのです。自分の思いや気持ちで、書かれていることを判断しているからです。自分でえり好みをしています。そうしたら、神のことばが神のことばでなくなってしまう。聖書が最終的な権威ではなく、自分自身が権威になってしまうのです。主が語られたというのは、そのまま受け入れるものなのです。そのことばを、そのまま神からのものとして受け入れるのです。「申 6:24 それで【主】は、私たちがこのすべての掟を行い、自分たちの神である【主】を恐れるように命じられたのである。今日のように、いつまでも私たちが幸せになり、私たちが生かされるためである。」

1C すべての命令

律法には、このことが強調されています。「申 6:24 それで【主】は、私たちがこのすべての掟を行い、自分たちの神である【主】を恐れるように命じられたのである。今日のように、いつまでも私

たちが幸せになり、私たちが生かされるためである。」

2C 一点一画

イエス様もこのことを強調されました。「マタ 5:17-19 わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。まことに、あなたがたに言います。天地が消え去るまで、律法の一点一画も決して消え去ることはありません。すべてが実現します。ですから、これらの戒めの最も小さいものを一つでも破り、また破るように人々に教える者は、天の御国で最も小さい者と呼ばれます。しかし、それを行い、また行うように教える者は天の御国で偉大な者と呼ばれます。」

3C 空文化する教え

このような言葉を聞くと、いかにも、学校で100点満点を取りなさいというように聞こえますね。そして、何点、テストで間違いがあったかという、減点方式のように聞こえます。けれども、こうした減点方式こそが、パリサイ人や律法学者が目指していたことです。しかし、イエス様は、彼らの義にまさっていなければ、天の御国に決して入ることができないと言われたのです。

では、いったいどういうことなのか？それは、主への恐れが薄まっているということです。神が語られているから、そのままへりくだって、受け入れて行くべきだというへりくだりがなくなっているということです。彼らは減点方式で、みことばを守り行おうとしています。すぐに無理が出てきます。そして、表向きは守っているように見せて、神の命令をないがしろにして、人の教えを守っているようなことをしていました。

例えば、コルバンという教えがあります。「マル7:10-13 モーセは、『あなたの父と母を敬え』、また『父や母をののしる者は、必ず殺されなければならない』と言いました。それなのに、あなたがたは、『もし人が、父または母に向かって、私からあなたに差し上げるはずの物は、コルバン(すなわち、ささげ物)です、と言うなら——』と言って、その人が、父または母のために、何もしないようにさせています。このようにしてあなたがたは、自分たちに伝えられた言い伝えによって、神のことばを無にしています。そして、これと同じようなことを、たくさん行っているのです。」

4C すべてを信じない者たち

そして、聖書を信じていると言って、どうしても、どこかで、そのまま素直に受け入れていないことがあります。当時のユダヤ人は、メシアが来られるのは力と栄光をもってであるとした。それは、聖書に書かれていることです。けれども、メシアが苦しみを経て、栄光に帰ることについての預言は、そのまま受け入れていませんでした。そのために、弟子たちは、主が十字架に磔にされて、よみがえると言われたことばを理解できていなかったのです。

エマオの途上に向かっていた弟子たちに、よみがえられたイエス様はこう言われました。「ルカ

24:25-27 そこでイエスは彼らに言われた。「ああ、愚かな者たち。心が鈍くて、預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち。キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、その栄光に入るはずだったではありませんか。」それからイエスは、モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた。」彼らは、預言を信じていたのです。けれども、すべてを信じていなかったのです。いつの間にか、権威が神ご自身でなく、自分たちになっていました。その分水嶺は、預言のことばをすべて信じているのかどうか？にかかっています。

5C 神のことば

このような態度と姿勢を持っていたのが、テサロニケの人々でした。「I テサ 2:13 こういうわけで、私たちもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたが、私たちから聞いた神のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実そのとおり神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いています。」神のことばを、神の権威ある言葉として、そのまま受け入れる時に、そのみことばは、信じている者たちのうちに、生きて働くのです。

2B 預言の確かさ

けれども、なぜ、そこまで信頼のできることばなのか？疑問に思われるかもしれません。聖書がすべて神のことばだとするのは、いささか、原理主義的ではないか、狂信的ではないか？と思われるかもしれません。ペテロは、第二の手紙で、自分はイエス様が栄光の姿に変貌したのを目撃したが、預言のことばは、さらに確かであると証ししました。そこまで確かなのです。

1C イザヤの預言

イザヤの預言を、40章以降を読まれることをお勧めします。主は、そこで、ご自身と、他に神々と呼ばれているものとを比較しておられます。そして、他の神々がおらず、わたしこそが神なのだと言明しておられます。その、もっとも大きな根拠は、ご自身の預言です。終わりのことを、初めから予め語られることによって、神々に対して挑みかかっておられます。「イザ 41:21-23 あなたがたの訴えを出せ。——【主】は言われる——あなたがたの証拠を持って来い。——ヤコブの王は言われる——持って来て、後に起ころうとする事を告げよ。前の事は何であったのかを告げよ。そうすれば、われわれもそれを心に留め、後の事を知ることができるだろう。または、来たるべき事をわれわれに聞かせよ。後に起ころうとすることを告げよ。そうすれば、われわれは、あなたがたが神々であることを知るだろう。良いことでも悪いことでもしてみよ。そうすれば、われわれはともに見て驚くだろう。」

そして、主は、150年後に起こることを、見事に詳細に渡って、語ってくださいました。それは、バビロンを、ペルシアの王キュロスが倒すことです。なんと、まだキュロスが生まれていないのに、名指しまでして、それでその人物が成し遂げることを語られました。「44:26-28 主のしもべのことば

を成就させ、使者たちの計画を成し遂げさせる。エルサレムについては『人が住むようになる』と言い、ユダの町々については『町々は再建され、その廃墟はわたしが復興させる』と言う。淵については『干上がれ。わたしはおまえの豊かな流れを涸らす』と言う。キュロスについては『彼はわたしの牧者。わたしの望むことをすべて成し遂げる』と言う。エルサレムについては『再建される。神殿はその基が据えられる』と言う。」キュロスは、バビロンの都の真ん中を流れている、ユーフラテス川をせき止め、その干上がったところから町の中に侵入させ、バビロンを倒しました。

さらにこう告げています。「45:1-3【主】は、油注がれた者キュロスについてこう言われる。「わたしは彼の右手を握り、彼の前に諸国を下らせ、王たちの腰の帯を解き、彼の前に扉を開いて、その門を閉じさせないようにする。わたしはあなたの前を進み、陰しい地を平らにし、青銅の扉を打ち砕き、鉄のかんぬきをへし折る。わたしは秘められている財宝と、ひそかなところに隠された宝をあなたに与える。それは、わたしが【主】であり、あなたの名を呼ぶ者、イスラエルの神であることをあなたが知るためだ。」このことも、ことごとく成就しました。

2C イエスの予告

そしてもちろん、イエス様が語られたことは、ことごとくその通りになりました。「ヨハ 13:19 事が起こる前に、今からあなたがたに言っておきます。起こったときに、わたしが『わたしはある』であることを、あなたがたが信じるためです。」そして、主は、前もって語られたように、十字架にはりつけにされ、三日目によみがえり、そして天に昇られたのです。

このように、前もって、先のことを語られます。私たちの今にまで至ることも主は語られ、これからのことも語られます。前世紀において、確かな歴史は、主が何度となく語られた、ユダヤ人が離散の地からイスラエルに帰って来るということです。それが、今に至るまで続いています。これは、イエス様が再び地上に戻っておられる時に完成することでしょう。

3C 啓示の完成

そして、この啓示は、聖書の最後で完結しています。「黙 22:18-19 私は、この書の預言のことばを聞くすべての者に証しする。もし、だれかがこれにつけ加えるなら、神がその者に、この書に書かれている災害を加えられる。また、もし、だれかがこの預言の書のことばから何かを取り除くなら、神は、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、その者の受ける分を取り除かれる。」今日、聖書のことばをそのまま、神のことばとして受け入れない傾向が、ますます強くなっています。ここは都合が悪いとして、何か人が書いたものであるかのように語ります。また、付け足す傾向も強いです。聖書に書かれていないことは私たちは黙っていればよいのに、憶測を付け足すのです。これが、テモテの周りにいた、悪い働き人です。作り話をしていたのです。聖書から取り除くことも、付け足すことも、呪いをもたらします。神のことばは、神のことばとなのです。聖書だけで良いのです。聖書こそが、知恵を与えて、イエス・キリストに対する救いをもたらすのです。